

「解答要素の読み出しのためのポイント」

# 論理展開と時系列の乱れは、テーマ・課題の書き出し(三段図の最上段)の段階で直しておく

二〇一六年度第一問 内田樹「反知性主義者たちの肖像」

<p>①課題の設定・大前提「知性の本質とその“敵”」</p> <p>全体のテーマ・主張(抽象) 関連の</p> <p>私たちが日本における反知性主義について考察する場合(設定課題)</p> <p>6段落 知性は「<b>集散的叡智</b>」として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなものを私は<b>知性と</b>呼ばない。(前提条件)</p> <p>10段落 知性は個人の属性ではなく、<b>集団的にしか発動しない。</b>(前提条件)</p> <p>8段落 集団として<b>情報</b>を採り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて<b>仮説</b>を立て、それにどう対処すべきかについての<b>合意形成</b>を行う。</p>	<p>傍線部(中間的・半端な表現) つねに念頭に置いておかなければならない</p> <p>↑ エその力動的プロセス全体を<b>活気づけ</b>、<b>駆動</b>させる力の全体を「<b>知性</b>」と呼びたい</p>	<p>実例・指示内容・明細(具体)</p> <p>「<b>反知性主義に陥る危険のない知識人はほとんどいない</b>」 (思想ある者にとってもっとも有効な敵(=反知性主義者)とは、<b>思想に</b>取り憑かれた知識人それ自身である) (ホーフスタッターの引用)</p> <p>ex2 「<b>知識の欠如</b>」ではなく、「<b>知識に飽和</b>されているせいで未知のものを受け容れることができなくなった状態」こそが「<b>無知</b>」である (ロラン=バルトの引用)</p>
<p>②集散的叡智の下位分類としての「個々の知性」</p> <p>4段落《本文前半、筆者のあやふやな記述》 単に<b>新たな知識や情報</b>を加算している<b>のではなく</b>、自分の<b>知的な枠組み</b>そのものをそのつど作り替えているからである。知性とは<b>そういう知の自己刷新</b>のことを言うのだろうか？ ↑ ろうと私は思っている。</p> <p>10段落《本文後半、伏線回収後の説明》 個人が私的に所有する<b>知識量や知能指数や演算能力</b>によっては<b>考量できない</b>。そうではなくて、その人がいること<b>によって</b>、その人の<b>発言やふるまい</b>によって、彼の<b>属する集団全体の知的パフォーマンス</b>が、<b>彼がい</b>ない場合よりも<b>高まった場合に</b>、<b>事後的に</b>その人は<b>「知性的」</b>な人物だと判定される。</p> <p>その人が活発に「<b>知力</b>」を<b>発動</b>しているせいで、</p> <p>11段落 彼の《<b>本文終盤</b>、<b>レトリック</b>による<b>伏線回収</b>》 所属する<b>集団全体の知的パフォーマンス</b>が<b>下がってしまっ</b>た<b>という場合</b>、</p> <p>私は<b>そういう人を「反知性的」とみなすこと</b>に<b>している</b>。</p> <p>これまでのところ、オこの基準を適用して人物鑑定を過ったことはない。</p>	<p>《本文前半、筆者のあやふやな記述》 アそのような<b>身体反応</b>を以てさしあたり<b>理非の判断に代</b>えることができる人を私は「<b>知性的な人</b>」だと<b>みなすこと</b>に<b>している</b>。 その人<b>においては知性が活発に機能</b>しているように<b>私には思</b>われる。</p> <p>《本文後半、伏線回収後の説明》 「<b>それまで</b>思いつかなかったことが<b>したくなる</b>」 というか<b>たちでの影響</b>を周囲にいる他者<b>たちに及ぼす力</b>のことを、<b>知性と</b>呼びたいと私は思う</p> <p>4段落(ex2)「<b>単独で存立する知識の飽和</b>」=「<b>無知</b>」 この人は<b>あらゆること</b>について<b>正解</b>を<b>すでに知</b>っている</p> <p>私たちの<b>気持ちはあまり晴</b>れることが<b>ない</b>、<b>解放感</b>を覚えることも<b>ない</b> そのような<b>言葉は確</b>実に「<b>呪い</b>」として<b>機能</b>している</p> <p>5段落 「<b>あなた</b>が何を考えようと、何をどう判断しようと、それは<b>理非の判定</b>に関与しない」ということは、ウ「<b>あなた</b>には<b>生きて</b>いる理由がない」と言われているに<b>等しい</b>からである。</p>	<p>《本文前半、筆者のあやふやな記述》 「<b>自分はそれ</b>についてはよく<b>知らない</b>」と涼しく認める人は「<b>自説に固執</b>する」ということが<b>ない</b>。他人の言うことをとりあえず黙って聴く。聴いて「<b>得心</b>が<b>いったか</b>」「<b>腑に落ち</b>たか」「<b>気持ち</b>が片づいたか」どうかを自分の内側をみつけて判断する。</p> <p>《本文後半、伏線回収後の説明》 ある人の話を聴いているうちに、…をしたくなったりしたら、それは<b>知性が活性化</b>したことの<b>具体的な徴候</b></p> <p>4段落 彼らは「<b>理非の判断</b>は<b>すでに済</b>んでいる。あなたに代わって私がもう<b>判断</b>を済ませた。だから、あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの<b>真理性</b>には何の影響も及ぼさない」と<b>私</b>たちに告げる</p> <p>11段落 個人的な<b>知的能力</b>は<b>ずいぶん高い</b>ようだが、その人がいるせいで<b>周囲から笑</b>いが消え、<b>疑心暗鬼</b>を生じ、<b>勤労意欲</b>が低下し、<b>誰も創意工夫の提案</b>をしなくなるといいうようなこと</p>
<p>③「反知性主義者」の判定についての筆者の考察</p>		

随筆の読解も批評的思考も、伏線把握した「ざら」にその後の整理が重要!

「二〇一六年度本試験 第1問」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 ホーフスタッターはこう書いている。  
反知性主義は、思想に対して無条件の敵意をいだく人びとによって創作されたものではない。まったく逆である。教育ある者にとって、もっとも有効な敵は中途半端な教育を受けた者であるのと同様に、指折りの反知性主義者は通常、思想に深くかかわっている人びとであり、それもしばしば、チンプな思想や認知されない思想にとり憑かれている。反知性主義に陥る危険のない知識人はほとんどいない。一方、ひたむきな知的情熱に欠ける反知性人もほとんどいない。

(リチャード・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳、**強調は引用者**)

2 この指摘は**私たちが日本における反知性主義について考察する場合**でも、つねに念頭に置いておかなければならないものである。反知性主義を駆動しているのは、**単なるタイダや無知ではなく**、ほとんどの場合「ひたむきな知的情熱」だからである。

3 この言葉は罗兰・バルトが「無知」について述べた卓見を思い出させる。バルトによれば、無知とは**知識の欠如ではなく**、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容れることができなくなった状態を言う。実感として、よくわかる。「**自分はそれについてはよく知らない**」と涼しく認める人は「**自説に固執する**」ということがない。他人の言うことをとりあえず黙って聴く。聴いて「得心がいったか」「腑に落ちたか」「**気持ち片づいたか**」どうかを自分の内側をみつめて判断する。そのような身体反応を以てさしあたり是非の判断に代えることができる人を私は「**知性的な人**」だとみなすことにしている。その人においては知性が活発に機能しているように私には思われる。

そのような人たちは単に**新たな知識や情報を加算しているのではなく**、自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替えているからである。知性とはそういう知の自己刷新のことを言うのだろうと私は思っている。個人的な定義だが、しばらくこの仮説に基づいて話を進めたい。

4 「**反知性主義**」という言葉からはその**逆のもの**を想像すればよい。反知性主義者たちはしばしば恐ろしいほどに物知りである。一つのトピックについて、**手持ちの合切袋から、自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらでも取り出すことができる。けれども**、それをいくら聴かされても、**私たちがの気持ちはあまり晴れることがない**し、解放感を覚えることもない。というのは、この人はあらゆることについて**正解をすでに知っている**からである。正解をすでに知っている以上、彼らはこの**是非の判断を私に委ねる気がない**。「あなたが同意しよう」としまいと、私の語ることの**真理性はいささかも揺るがない**というの**が反知性主義者の基本的なマナー**である。「あなたの同意が得られないようであれば、もう一度勉強して出直してきます」というようなことは残念ながら反知性主義者は決して言ってくれない。彼らは「**是非の判断はすでに済んでいる**。あなたに代わって私がもう判断を済ませた。だから、あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの**真理性には何の影響も及ぼさない**」と**私たちに告げる**。そして、そのような言葉は**確実に「呪い」**として機能し始める。というのは、そういうことを耳元でうるさく言われてるうちに、**「こちらの生きる力がしだいに衰弱してくる**」からである。「あなたが何を考えようと、何をどう判断しようと、それは**是非の判定に関与しない**」ということとは、「**あなたには生きていく理由がない**」と言われてるに等しいからである。

5 私は私をそのような気分させる人間のことを「**反知性的**」と見なすことにしている。その人自身は自分のことを「**知性的**」であると思っているかも知れない。たぶん、思っているだろう。知識も豊かだし、自信たっぷり語るし、**反論されても少しも動じない**。でも、やはり私は彼を「**知性的**」とは**呼ばない**。それは彼が知性を属人的な資質や能力だと思っているからである。だが、私は**それとは違う**考え方を**する**。

6 知性というのは**個人においてではなく、集団として発動するものだ**と私は思っている。知性は「**集合的叡智**」として働くのでなければ何の意味もない。**単独で存立し得るようなものを私は知性と呼ばない**。

7 わかりにくい話になるので、すこしいねいに説明したい。

8 私は、知性というのは**個人に属するものというより、集団的な現象だ**と考えている。人間は**集団として**情報を採り入れ、その**重要度を**衡量し、その意味するところについて**仮説を立て**、それにどう対処すべきかについての**合意形成**を行う。その**力動的プロセス全体**を**活気づけ**、**駆動させる力**の全体を「**知性**」と呼びたいと私は思うのである。

9 ある人の話を聴いているうちに、ずっと忘れていた昔のできごとをふと思いついたり、しばらく音信のなかった人に手紙を書きたくなったり、凝った料理が作りなくなったり、家の掃除がしなくなったり、たまっていたアイロンかけをしなくなったりしたら、それは**知性が活性化**したことの**具体的な徴候**である。私はそう考えている。「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの**影響を**周囲にいる他者たちに**及ぼす力**のことを、**知性と呼びたい**と私は思う。

10 知性は**個人の属性ではなく**、**集団的にしか発動しない**。だから、ある個人が**知性的**であるかどうかは、その人の**個人が私的に所有する知識量**や**知能指数**や**演算能力**によつては**考量できない**。そうではなくて、その人がいることによつて、その人の**発言やふるまい**によつて、彼の**属する集団全体の知的パフォーマンス**が、**彼がい**ない場合よりも高まった場合に、**事後的に**その人は「**知性的**」な人物だと判定される。

11 個人的な**知的能力**は**ずいぶん高いようだが**、その人がいるせいで**周囲から笑いが消え**、**疑心暗鬼**を生じ、**勤労意欲が低下**し、**誰も創意工夫の提案**をしなくなる**という**ようなことは**現実にはしばしば起こる**。きわめて**ヒンパン**に起こっている。その人が**活発に**ご本人の「**知力**」を**発動**しているせいで、彼の**所属する集団全体の知的パフォーマンス**が**下がってしまう**という場合、私は**そういう人**を「**反知性的**」とみなすことにしている。これまでのところ、この**基準**を適用して**人物鑑定**を過つたことはない。

(内田樹「反知性主義者たちの肖像」)

[注] ○リチャード・ホーフスタッター——Richard Hofstadter (一九一六—一九七〇)。アメリカの歴史学者・思想家。

○罗兰・バルト——Roland Barthes (一九一五—一九八〇)。フランスの哲学者・批評家。

問1 「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」(傍線部ア)とはどういう人のことか、説明せよ。

問2 「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

問3 「『あなたには生きていく理由がない』と言われてるに等しい」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

問4 「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」(傍線部エ)とはどういう力のことか、説明せよ。

問5 「この基準を適用して人物鑑定を過ったことはない」(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で一〇〇字以上二二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

問6 傍線 a、b、c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

- a チンプ      b タイダ      c ヒンパン

### 解答(青本 大学年度別)

1 他者の言葉を自らの身体的な実感でその当否について判断し、知的枠組みを柔軟に刷新して未知なるものを捉えようとする人。

2 反知性主義者は自己の信ずる真理性を絶対的なものと思ひ込み、他者の判断を考量する余地は全く持たないということ。

3 自己を絶対化して他者の判断を無化する反知性主義者の言動は、人々の生きる力を否定して衰弱させる機能を持つということ。

4 相互に影響を及ぼすことで人々に新たな気づきと発想をもたらし、集団全体の知的活動を刺激して合意形成へと促す知性の力。

5 現在の日本を考へるとき、自己の独善的な主張を周囲に強いる人間が知性的であった例のないことから、私たちは反知性主義者の偏った情熱に屈することなく、知性を重視して他者とともに自己刷新をつづけ、集団全体を知的に活性化していく必要があるということ。

### 解答(河合塾 翌朝の解答速報)

1 他人の話 を分かつたつもりにならず、それに耳を傾け、その内容を実感として納得できたか否かを、自らの知の枠組みが 揺らぐままに 内省できる人。

2 自説を根拠づける豊富な知識を盾にして他人に一方的に語る人は、自らの思考枠が全てに妥当する 絶対性を備えていると思ひ込んでいる こと。

3 他者と応答し合いながら知を生成していくという人間の生のあり方が否定されるのと同じだということ。

4 集団内でのやりとりを通じた合意形成に至る過程で、個人だけでは思いもよらぬ発想を人々にもたらし、人々相互の活発な知的活動を創出する力。

5 知性とは、個々人が互いに異なる意見に耳を傾け、自らの思考枠を刷新しつつ集団の知的活動を活性化するものである以上、自己の知識を誇示し、独断的な考えを主張するだけで、他の人々の知的創造力を失わせる人物が、知性的であったためにはないということ。